

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別政承認雜誌第六二七号
平成二十二年八月一日発行(第百十三卷第八号)

ホトトギス

八月号



俳句随想 〔三百二十八〕

汀子

俳句は日本固有の文芸である。世界で一番短い詩、五七五の十七文字から成り、短くて何程のこととも言えない。と言っても、その中に大きな意味が含まれ、大きな世界が詠めるのは、季題の働きを借りるからである。季題に語らせるというこれも日本独特の自然に対する日本人の思いや作品の蓄積があるからである。

ドイツ・ミュンヘンの俳人ギユンタ・クリンゲ氏は毎年のように日本に來られ、俳句に造詣が深かった。ご自分も三行詩と称してドイツ語で作って居られた。

日本の俳句を深く知りたいという熱心な思いを持たれ、日本人であっても深く考えていない人が多い中で真面目に様々な質問をされた。

「ドイツ人は自然だけを詠むのではものたらないと思つている。思想、人間、恋愛などを詠んではいけないか」という質問を真面目にされた。私は次のように答えたのである。

「勿論、日本人もそれは考えていると思います。でも、それらを詠む方法として、季題に語らせるのです。感動を述べるのではなく感動に誘われたものを描写する。俳句は季題が重要な力を発揮するのです」と答えた。加えて省略の技に及び、一句の背景として感動したものが伝わるということを申し上げた。

旬日記 汀子

平成二十一年八月一日 東海ホトギス俳句大会前日句会

やかましきことが信条とは祭
トンネルを抜く梅雨霧に捉はれし
考へる水の命よ露涼し

八月二日 東海ホトギス俳句大会

駅前の一と塊が祭とや
一巡り又一巡り祭町
八月三日 ロイヤル俳壇

文月に届きし訃報海越えて
遠き旅終へて家路の秋近し
落し文一つ拾へば風の音
明るさを少し落して秋近し
これよりの過ぎてゆく日々秋近し

八月六日 清交社

工事場の音に残暑のありにけり
早晩の旅路となりぬ風仙花
考への二転三転秋に入る
初秋の旅の切符を送り来し
計りごと着々秋を近づけて
皆触れてつまくなみの種とばす

八月八日 野分会夏行

京の盆その一割に加はりぬ
せめて片陰を拾はん傘忘れ
地獄絵を抜け片陰の風に逢ふ
盆帰省承知車の渋滞に

八月八日 第二句会

宴果つる頃は残暑のをさまりぬ
八月九日 野分会夏行

一切は雨に明けたる京の秋
皆戻りゆく地の秋の雨如何に
古都に降る残暑沈めの雨として
八月十一日 大阪倶楽部

鯛の鳴けば雨止みぬしことを
雨はげし残暑を洗ひ流すほど
流星に間に合ふ夜空とのへり
雨風に耐へねばならぬ稲の花
八月十一日 綿業倶楽部

初秋のかく荒るる日もあることを
曇のち晴のち雨も秋はじめ
銀河見し山荘遠き目のことを
八月十六日 下萌句会

人数の西瓜切る目となりにけり
鯛の遠ざかりたる下山かな
朝の雨止みて露けさ残さるる
新涼のペランダなるも未完成
八月十八日 有恒倶楽部

花火見るための一席ととのへり
初秋と思へる朝の過ぎ易く
三十年経ちても同じ墓参かな
鳴いてある命の証秋の蟬
木星を見て流星は見えざりし
八月十八日 無名会

又今日も残暑の外出なりしかな
門火焚く人の真顔を見逃さず
送火を終へてくつろぐ心はも
これよりの残暑の旅を思ひけり
みちのくの秋をたづぬる旅の待つ

星を見る夜風消しくれたる残暑
今日よりは残暑と思ひつゝ耐ふる
八月十九日 夏潮句会

郷愁は銀河の見えぬ闇仰ぐ
木星の輝き銀河見えずとも
木星の孤高の光放つ秋
新豆腐とて改めて味はへば
これよりの夜空楽しむ秋となる
澄む水に放つ命の記憶繙けり
銀河濃し心の記憶繙けり
八月二十日 東北ホトギス俳句大会前日句会

新涼やここは津軽の城下町
薄紅葉とも言へぬほど薄紅葉
消えてゆくととき秋の雲なりしかな
爽やかに聞き逃さじと津軽弁
八月二十三日 東北ホトギス俳句大会

朝かげを置くみちのくの鱈雲
快晴へ刻々岩木山の秋
秋の雲離合集散岩木山
八月二十八日 河野美奇句集序句

草花を愛で爽やかな為人
博識を愛で爽やかな為人
八月二十八日 時雨会

心眼を加へて仰ぐ星月夜
計画は星のきざし星月夜
七日月満つれば盆の月といふ
ぶり返す残暑の待つてゐる朝
八月二十九日 ホトギス社吟行会

限りなき快晴を呼ぶ草の露
台風の予報は遠し外出す
元氣かと問はれ元氣といふ残暑
着席す新涼の風伴ひて

廣太郎句帳

廣太郎

青鷺の孤高の距離でありにけり
秋立てり五重塔の天辺に

八月十日 朝日カルチャー若草句会

白粉の花指先がためらへり

おしろいや宴たけなはといふ時間

初秋の空太陽を拒みけり

初秋や俳句甲子園談義など

初秋の嵐豪雨といふ天与

八月十二日 一水会

日表は虚子の極楽一葉落つ

八月十三日 土筆会

渋搗いて本家分家でありにけり

後楽園法師蟬寿

稲の花名苑の景遠ざけて

八月十八日 草木瓜会

赤々と雲白々と稲の殿

その中に稲妻秘めて雲動く

阿波の夜を揺さ振つてゐる踊かな

踊の四星引き寄せてをりにけり

八月二十日 登高会

京の路地狭め草市広がれり

銀の雲と存問金糸草

手花火にへつびり腰の餓鬼大将

終の玉ちりと線香花火消ゆ

手花火の消えれば星と語る闇

八月二十二三日 東北ホトトギス俳句大会

本州の北の端てふ新涼に

稲の花抜け稲の花抜けて街

天守閣露けき高さありにけり

津軽富士てふ爽やかな裾野かな

みちのくの空を整へ罫雲

八月二十五日 若水句会

秋の蟬声小さくなる低くなる

移りゆく四季よ時代よ盆の月

落ちること忘れたやうに秋の蟬

大根時く三百五十へクタール

転調をして秋の蟬らしくなる

八月二十六日 目黒文学園句会

新豆腐鼻に抜けゆく香の至福

稲妻に明け渡したる空の黙

生身魂今から句会明日茶会

稲の殿星座を明かしゆく疾さ

八月二十九日 ホトトギス社吟行会

秋蟬のために高さを競ふ木々

子規詠みし蓮池といふ気品かな

八月三十一日 夢二三全国俳句大会前日句会

忌心に句心重ね厄日かな

台風を引つ提げて来る雨男

台風も温泉の景として見れば
霧包む最上階の静寂かな

平成二十一年八月二十二日 東海ホトトギス俳句大会

川幅を涼しく消してゆく豪雨

明易や夢の中なる笛太鼓

八月三日 はせを句会

五十年火蛾と付き合ひ荘を閉づ

秋近しもう会はないと決めてより

八月六日 蕉心会

吹つ切れてよりの晩夏でありにけり

原爆忌大川に時流れゆく

冷房の効く席今日はカツカレー

大川の叫び原爆忌の憂ひ

夜の秋紫煙は宙に止まりて

病葉に風の余韻を乗せて掃く

令夫人集金したる暑氣払ひ

八月八日 野分会夏行

昂りを残して祇園祭あと

佇めば新涼の風聞く古刹

屋根の反りより新涼の滑りくる

雑詠

廣太郎 選

み吉野の花にも悼みかさねけり 京都 安原 葉
 冷ゆる夜の落花一片とてあらず 同
 花の散る軽さにも似て山下の 同
 春風に押されて前へ一歩づつ 神戸 山田佳乃
 想ひ出を辿るメモ帳つくづくし 同
 歌だけの雛祭なり薄日差す 同
 退院や摩耶をはるかに草青む 同 保田 晃
 淀どのの天守そびらに梅林 同
 淀どのの遺愛の梅と仰ぎたる 同
 東風といふ詩となられし霊仰ぐ 福山 竹下陶子
 東風声をあげ源平を物語る 同
 蟻穴を出て太陽の子となりぬ 同
 枝先に日ざしふるへて朝桜 龍ヶ崎 今橋眞理子
 白波となる春光を集めては 同
 霞みつつのまま今日の富士となる 同
 手作りの雛流してこころ足る たつの 浅井青陽子
 筥のいびつにもたぐ後苑に 同
 惜春のこころに訪ひし水亭に 同

燕来て早速空をずたずたに 熱海 嶋田摩耶子
 通称は干物屋銀座燕とぶ 同
 贅沢と思ふ退屈日向ぼこ 同
 咲き進むより散りしきる花にこそ 八尾 山下美典
 満開となれば落花といふ期待 同
 雑魚干して網干して浦日永なる 同
 花嵐俳誌の行方見失ふ 奈良 古賀しぐれ
 決断は早きがよけれ朝桜 同
 やる他はなし春風に歩き出す 同
 春愁の溜息にただ付き合ひぬ 香川 湯川 雅
 竹の秋へと風溜めてゐるところ 同
 春愁の耳風音に塞がるる 同
 花むしろごと浮きさうな笑ひかな 東京 橋本くに彦
 満開の調子に乗つた桜かな 同
 花咲くや進化せしものせざるもの 同
 ペン先を見つめ緊張解く受験 神戸 涌羅由美
 ものの芽の未来を解く風のあり同 同
 春の潮鳴門に力溜めてをり 同
 低くとぶ燕に家並ありにけり 熱海 嶋田一步
 今もいふ宿場町てふ燕とぶ 同
 つばくらめ一直線が好きでとぶ 同
 亀鳴いてむささび飛んで闇深き 東京 今井千鶴子
 それとなくいたはられみて花の杖 同
 みよし野の花に通ひて二十年 同

雑詠句評（七月号より）

千鶴子・芳子・憲明
むつみ・葉・眞理子
とほ歩・中正・静龍
美奇・保佳・廣太郎

あまりにも哀しき訣れ梅二月 西宮 田中祥子

追悼句。二月、急逝された山田弘子氏との訣れであろうことは、想像に難くない。訣という字は「きつぱりとわかれる」又「死別する」の意味を持つ。同じ「わかれ」でも別とはいささか字の意味が違う。句意は説明を要さない。弘子氏の死はしんそ我々を驚かせ悲しませた。殊に関西で平素句座を共にしておられた作者はじめお仲間の方々は尚のことであつたらう。哀という字もまた「つらく切ないかなしみ」をあらわす文字である。「梅二月」はきりりと冷たい二月に開く梅、華やかであつた弘子氏を彷彿させる紅梅のような気がする。（千鶴子）

どうしても山田弘子様急逝の悲しみが伝わってくるが、こゝまで述べられてしまうと、ちょっと救いのないような恐ろしさをも

感じてしまうが、ここに「梅」という季題を詠み込まれた事作者の力量を感じる。この句の背景には、遺された人へのエールを感じられるのである。（廣太郎）

君偲びつつ雛の間に一人かな 京都 安原 葉

偶々俳誌「田鶴」四月号が届き、夏潮句会々報の欄にこの句が汀子先生の入選句に掲げられていた。この句ともう一句同じ作者の句で、「飾られし雛にも君の偲ぶるる」があり、三月十七日汀子邸の雛の間に通され、つい一月前に突然亡くなった山田弘子さんの事と解つた。高僧らしく沁々とした追慕の句である。皆に惜しまれ未だに信じられない事であるが、「雛の間に一人」に哀悼の心が溢れている。本当に勿体ない悲しいお別れであつた。（芳子）
こちらでも亡くなった方を偲んでいる作者の姿が見て取れる。やはりどうしても季題から、山田弘子様であろう。筆者は、前掲中村芳子様が書かれている出来事は知らないが、長年句友として付き合ってきた作者の、季題を通してしみじみと感じている懐かしい思い出なのである。（廣太郎）

天地有情

花子選

下萌や神の計画とは不思議
神のみぞ知ることの多過ぎる春
鯉一擲花の静寂を破りけり
身じるぎもせず柔らかに花の息
みよし野の桜の句集編むと聞く
庭奥を巡り桜の精と会ふ
春寒のきびしさ言ひて別れけり
水亭の歴史を語り春惜む
み吉野の奥へと続く花の峰
庭先の芽独活もてなす山の宿
再会は宇宙の何処花の暮
爛漫の花の夕空流るゝ身
元箱根雑草園の木の芽吹く
枝に色生まれ木の芽となりけり
人死んで人死んで花散り止まず
花咲くを詠み花散るを詠みて生く
提灯の字の揚巻も飾羽子
初伊勢に被る三度笠 饅頭笠

東京 稲畑廣太郎
同
樞原 稲岡 長
同
東京 今井千鶴子
同
たつの 浅井青陽子
同
京都 安原 葉
同
豊中 滝 青佳
同
熱海 嶋田 一步
同
大阪 蔦 三郎
同
神戸 後藤比奈夫
同

野遊やころばなければ止まれぬ児
野遊の日がな四葉を探しをり
空港の出来て飛機とび山笑ふ
ふくらむといふ可愛さや葱坊主
初蝶の切り開きゆく未来かな
たましひもしだれて風の桜かな
君偲びつつみ吉野の花は葉に
祝詞あげ祓ひ給ひし花の霊
かく溢れをる春光に欠けしもの
ふと君の在すか風の初桜
端座してやがて雛の世に入りぬ
半顔に灯のさす雛の愁ひかな
建仁寺八百年の下萌ゆる
師と翁の春の語らひ庭百年
歳月の記憶交々 虚子椿
能登言葉親しと句碑のあたたかく
風一日 白木蓮の照り翳り
三月の光と影の過ぎゆきぬ

東京 内藤呈念
同
熱海 嶋田摩耶子
同
波川 木暮陶句郎
同
神戸 長山あや
同
東京 河野美奇
同
福岡 松永唯道
同
吹田 宮崎 正
同
金沢 藤浦昭代
同
龍ヶ崎 今橋真理子
同

天地有情句評

汀子

春寒のきびしさ言ひて別れけり たつの 浅井青陽子

油断ならぬ春寒をいとう挨拶。

庭先の芽独活もてなす山の宿 京都 安原 葉

山宿の心尽くしの山菜料理。

爛漫の花の夕空流るゝ身 豊中 滝 青佳

爛漫の花に身を任せる詩心。

枝に色生まれ木の芽となりけり 熱海 嶋田 一步

自然の命の不思議。

花咲くを詠み花散るを詠みて生く 大阪 蔦 三郎

人生のはかなさ。

神の計画に従う自然と人間。

下萌や神の計画とは不思議 東京 稲畑廣太郎

鯉一擲花の静寂を破りけり 樞原 稲岡 長

静と動。

庭奥を巡り桜の精と会ふ 東京 今井千鶴子

花下の幻想。